

IN 会員ら 18 人が JICA 関西を訪問

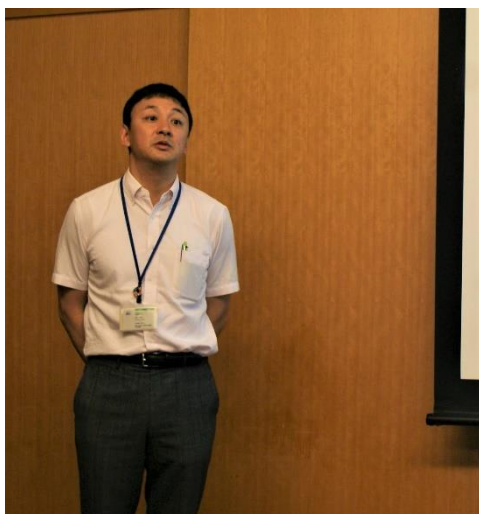
途上国支援の大切さと、

青年海外協力隊員の体験談を聞く

IN 会員らが 5 月 21 日、開発途上国への支援活動が続ける JICA 関西（神戸市中央区）を訪れ、途上国への支援の意味とその内容を、また、アフリカ東南部にある小国、マラウイで地質学の知識を活かしてダイヤモンドなどの鉱物資源探しに従事した元青年海外協力隊の女性から体験談を聞かせていただきました。今回 JICA 関西を訪れたのは実用日本語学習会のメンバーを含め例年より多い 18 人で、半数以上が初めての訪問のようでした。

JICA とは？なぜ、途上国を支援するのか

JICA 関西国際センターの遊川章宏さん＝写真左＝が昨年通り、途上国支援の必要性をスライドで説明しました。その要旨は—



世界には 196 の国に 76 億人が住む。そのうち、開発途上国は 150 カ国にのぼり、人口では世界の 80%を占める。途上国では学校に行けない子供たちが 6700 万人、5 人に 1 人は 5 歳になるまでに亡くなる、などの厳しい現状を紹介。

続いて、日本に食料、石油、天然ガス、レアアース、レアメタルなどを輸出してくれているのはどんな国か？と問いかけ、「我が国は、これらの国々からモノを買い、世界に評価の高い製品を途上国の人たちにも買ってもらっている。我々の生活は途上国と深くかかわっています」と説明しました。

さらに、日本は戦後の復興・発展のため、世界銀行などから多額の財政支援を受け、東海道新幹線、黒部第 4 ダム、東名高速道路などを建設、発展の礎を築いてきた。2011 年の東日本大震災では 174 カ国から 1640 億円もの支援を受けた。

「日本は地震など災害が多いだけに、外国から結構、多額の援助を受けている。

援助してくれる国の中には最貧国に分類される国もかなりあります」と“お互い様”を強調しました。

JICA (Japan International Cooperation Agency=日本国際協力機構) とは日本の ODA (政府開発援助) の実施機関。二国間協力では技術協力、無償と有償の資金協力、国際緊急援助、さらに市民参加協力があり、市民参加の活動には青年海外協力隊やシニアによる技術協力、ボランティア活動がある。

途上国の人づくりも重視しており、国造りの中核となる人材を育てるため、各国政府からの要請に基づき、毎年、約 150 の国から 1 万人を超える行政官や技術者などを、技術研修員として受け入れている。将来、国を背負う彼らに、日本での生活を通じて日本の伝統・文化に対する理解も深めてもらっている。JICA の理念は、途上国のために魚を取って、あげるのではなく、網を作り、魚の取り方を指導し、後は、その国が自力で持続可能な発展を続けられるように支援してあげることと説明しました。

マラウイでダイヤ、金などの鉱石採取に従事

続いて、青年海外協力隊員として、1998 年から 2 年 4 ヶ月間、アフリカのマラウイに派遣されてダイヤモンド、金など鉱石探査に携わった津田かおりさんの体験談。タイトルは「The warm heart of Africa!」。

マラウイはどんな国

アフリカ大陸東南部に位置し、面積は北海道と九州を合わせたくらい。人口は日本の 8 分の 1。公用語はイギリスの保護国だったことから英語と自分たちのチェワ語。国民一人あたりの GDP は昨年、世界のワースト 3 に入る貧しい国、ということです。

なぜマラウイに？

兵庫・三田出身。「田舎育ちで海外に行きたいと思ったことはなかった」。しかし、高校一年の時、社会科の先生から「青年海外協力隊に入りたいと思ったが、年齢制限(当時の)にひっかかって行けず残念だった」という話を聞いた。心のどこかにこの言葉が残っていた。

短大で情報処理工学を学び、就職しようと思っていたが、自然科学が好きなことから岡山大学の理学部地学科に編入した。しかし、就職したのは大阪の民間会



マラウイについて語る津田さん

社。1年ほど、営業の仕事をしたが、大学で学んだことが生かされず「これでいいのか？」という思いがあった。そんな時、高校の先生が話していた JICA についての PR ポスターを駅や列車内で見た。

「地質調査」の協力という数少ない項目があり、その年は一人だけの募集。「これはもう、受験するしかない」と思って応募した。合格したら、津田さんがほとんど何も知らない「マラウイという国に行ってください」。

津田さんは、IN らのメンバーが「退屈しないように」と、○か×か、を問う形式で質問し解説しました。

Q マラウイはいつも暑くて乾燥している。 答えは×。

アフリカ大地溝帯の上に位置し、高地も低地もあり、暑いところや涼しいところも。山の上では暖炉のある地域もある。雨期には野菜もたくさん採れ、水田で米を作っている地域もある。



Q マラウイの人は直にライオンを見たことがない。 ○

カバが多く、ワニ、ハイエナもいるが、ライオンはテレビで見るぐらい。

アフリカというとライオンやマサイ族の戦士を連想しがちだが、ステレオタイプの考えは正しくない。

Q マラウイの男性は会社に行く時、スーツを着る。これも○。

イギリスの植民地だったので、スーツを着こなすことがカッコいいと思われる。

この他、様々な質問と説明がありました。

主食はトウモロコシの粉を練ったシマ。キリスト教国なので食べ物はほとんど何でもOK。ユニークなのは羽アリ。羽を取り去り、油で揚げて食べる。これが貴重な栄養源になっている。ある時、「山盛り採れたので食べて」と出された。悩んだが食べてみた。「食文化というものは不思議なもので、慣れるとだんだん、美味しいと思うようになりました」と言う。そして、「そういう人達もいるのだ、と思うことが大切だ」と考えるようになった。

国立病院が大きな街に一つあったが患者の長行列。翌日にならないと診察してもらえないことも。学校は設備が悪い。教室が足りない。貧しくて教科書を買えない子が多い。国は教育改革に力を入れており、日本も支援しているが、追いつかない。

「日本では宿題が嫌だ！と学校を嫌う子がいるが、マラウイでも学校や勉

強が嫌で退学する子も多いし、学校に行かなくていいと考える親も多い」と津田さん。

知人にボクシングを始めた子供がいた。「なぜ？」と聞いたら「お金を貯めて高校で勉強したいから」という返事だった。そんな子もいる。

多くの日本人はマラウイのことを知らないが、マラウイの人はけっこう日本を知っている。

車や電化製品を通じてポジティブなイメージを持ってきているからのように、中国と間違えている人も。ジャッキー・チェンも日本人と思っている人が多かったという。

マラウイでやっていたこと



国立地質調査所の同僚たちと津田さん（前列左から2人目）

マラウイには国立地質調査所があり、「ダイヤモンド・プロジェクト」に参加した。男性が中心の職場。金、銀、ダイヤなどお金になるものを探す仕事。実際は砂金探しの仕事がほとんどだったが。

日本では機械でボーリングするがマラウイでは手作業。津田さんは土を持

ち帰って分析したり、分析機自体の整備、点検など。最初に予想していたことと、かなり違った仕事が多かったという。

同僚は米国、英国などに留学し大学院を出た人たち。そんな中で「私に何ができるだろうか？とすごく悩んだ時期があった」という。しかし、「ここに私がいるのだから、私ができることは何でもやる」と考え、2年4ヶ月、働き続けた。

温かい心

マラウイの人に「あなたは何歳？」と尋ねたら「20歳くらい」などと言う返事があった。

親が読み書きできないから、誕生日の記録がはっきりせず、about な年齢しか知らない人もいる。だから、誕生祝いという習慣もほとんどない（最近はかなり良くなってきたらしい）。

津田さんもマラウイでは自分の誕生日のことはすっかり忘れていた。ところが、同僚の女性とその主人がある日、「今日はおおりの誕生日だね。何かプレゼントを買いたかったがお金がなかったので…」と鳥の卵を二つくれた。鳥は彼らが生活の糧のために飼っていた。

「私の誕生日を覚えていてくれただけでも、すごくうれしかったのに…。優しい心遣いに感激、忘れられない思い出になりました」。津田さんによると、「若かったせいもあるが、このころが私の人生でもっとも、喜怒哀楽が多かった」という。

「日本はいいとこだなあ」といってくれる人が多い。「なんで？」と聞くと、「日本車は上等なうえに安い」などと言う。イギリスの植民地だったので同じ右ハンドルの日本車の中古車がたくさん、流れてきて街を走っており、車体には「大分消防署」、「東条湖ランド」などの文字が。

帰国したら驚きがいっぱい

日本に帰って来たら戸惑うことが多かった。東京で研修があった。駅では分刻みで時刻表通りに電車がやってきて、しかもどの電車も満員。すごいことだが「なんて忙しい国だ」と感じた。自販機がモノを言う。コンビニに入ったら「いらっしゃいませ。こんにちは」と挨拶してくれる。で、「暑いですねえ。さっきまで、〇〇へ行ってきまして…」などと話しかけたら、店員さんがすごく困った表情を見せた。マニュアルにそこまでの対応の仕方は書いてないのだろう。

「自販機など機械までが挨拶してくれるのに、相手の人間にはあまり興味を示さない。気持ちは入ってないのかなあ」とすごく戸惑ったという。

マラウイでの体験から考えたこと

「経済的にはマラウイはすごく貧しい。しかし、『彼らは不幸か?』と言うとそうではない。悩みや喜びの中で、自分たちに出来ることを日々、一生懸命やって暮らしている。経済的な発展だけがすべてではない、と思うようになった」。

結局、日本人とマラウイ人とは何が違うのか?と考えると「生まれた場所が違うだけ」と思った。そして、「自分や日本に生まれた人は、今ここで自分ができることをする、ということが一番大切じゃないかと思います」と言う。

帰国して、家族を持ちたいと思って結婚し目下、子育て中。そんな中で、自分

がすべきことは何だろうと考えて得た結論は、「一つはマラウイのことを知ってもらうこと。そして、子育てが落ち着いたら、また、何かをしたいなと思っています」と話しました。

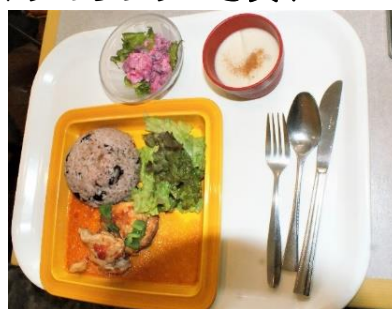
展示室の見学とエスニック料理のランチ



このあと、一階にある展示室の見学＝写真左。参加者はパネルでの広報展示のほか、途上国から寄せられた様々な民族衣装や楽器等に興味深く見入っていました。

最後は月替わりのエスニック料理。この月はハイチのランチ＝写真下＝

で、ココナッツミルクで炊いた豆ごはん（金時豆）に鶏肉のソースをかけて食べる料理。これに赤カブが入ったピンク色のポテトサラダ、プリン風の柔らかいソースデザートが出ました。ハイチでは最もポピュラーな食事とのこと。



以上